

はじめに

平成19年度の長岡造形大学デザイン研究開発センターの活動報告をいたします。

本年度の当センター受託プロジェクトの全容を見渡すに、昨年度までの流れが大きく変わった点は見当たりません。

昨年度に引き続いて中越地震、中越沖地震の災害復興やそれに関連した行政関係から委託されたプロジェクトが多くを占めていますが、これは、デザインがこのような課題に応える大きな力を備えている、デザインせねば良い成果に結びつかない、という認識を抱いていただいているという証であり、まずクライアント各位には、そのような見方をしていただいていることに感謝いたします。

見方を変えると、災害復興やそれに関連したプロジェクトにデザインが大きく貢献できるということの実証であったわけです。これは広い視野でデザインの持つポテンシャル（広く深い強い力）を見ていただける形をつくってきたことでもあります。デザインの力、造形大の力を見ていただく大きなチャンスであったわけで、当センターの大きな飛躍への一歩でもあったわけです。

他のプロジェクトにも勿論、本学のデザイン力でこそその成果が多々見られることは言うまでもありません。デザインはだれでも語れるが、専門性の中で追及するそれは全く違うということの一つひとつ積み重ねていくことが当センターの今の仕事と考えていますが、その歩みが着実に進められているものと実感させられております。

改めて、クライアント各位のデザインの見識に敬服し、感謝するとともに、関わられた教員はじめメンバーの方々は本当にご苦労様でした。

さて、長岡造形大学は開学15年目を迎え、本学への期待、デザインへの期待が一つの峠にきたかの感があります。これまで当センターが受託し応えてきた内容はそれぞれは素晴らしいものであり、プロジェクトを通してデザインが地域に根付き、着実な貢献がなされ、それも一定の定着が見られるようになったと思っております。しかし、まだまだこれで十分とは思っておりません。これまでの経験を踏まえ、組織の在り方、受託契約の仕方や進め方、プロジェクトの量や質も、根本的に見直して、より密度の濃いセンターを目指し、次代への脱皮を計って行かねばと思います。

あらゆる面においてひしひしと厳しさが迫る今日、容易にはいきませんが、模索しながらできるだけ早い時期に、長岡造形大学デザイン研究開発センターの次の新たな形を築き、いっそう心豊かな長岡、新潟、日本、世界のデザイン像を発信していかねばと思っております。まだまだこれからですが、ご期待いただきたいと思います。

平成20年3月

長岡造形大学
デザイン研究開発センター長
松 丸 武

1. 受託プロジェクト報告

受託事業名：

窓枠物干しデザイン制作業務

発注者：オークス株式会社

受託期間：平成19年1月26日～平成19年3月31日

プロジェクト主査：境野広志

プロジェクトメンバー：黒崎英也

●委託内容

近年、プライバシーや建物の外部景観への配慮から洗濯ものを室内に干す需要が高まってきている。そこで、住宅内の特にサッシ等の窓枠に注目し、そこに容易に設置、使用、収納できるタイプの物干しについて、デザインの提案をすることを委託された。尚、既に発注者側としては窓枠の内側に取り付けるタイプ（インセットタイプ）とカーテンレールの外側に取り付けるタイプ（アウトセットタイプ）の技術的検討をしており、提案はこの二つの方式をベースに行った。

●検討内容

今回の商品について、その使用者や剛性を考慮して、以下の項目をデザイン検討のポイントとした。

- ・取り付けが建物完成後にも容易にできること
- ・使用状態と収納の操作が女性でも容易にできること
- ・カーテンの邪魔にならずに使用できること
- ・必要により、ポールが取り外せること
- ・外観は住宅内で違和感の無いものとする

以上の点から、インセットタイプでは当初回転構造を検討したが、軸受け部の強度面等から伸縮可能なポールを使い、ヒンジ構造で、カーテンを操作することなく出し入れを可能な方式とした。アウトセットタイプでは、カーテンレールの外側から回転構造で昇降するタイプを提案した。



図4 フレクリーン（オークス株式会社）

●試作及び商品化

商品化を考え、インセットタイプについて試作を行った。

以上の検討を踏まえ、インセットタイプ（フレクリーン）を商品化した。



図1 試作品使用時



図2 試作品収納時



図3 試作品操作方法

受託事業名：

ワインクーラーのデザイン開発（“LED卓上ライト” デザイン提案業務）

受託者：八木澤技術士事務所

受託期間：H19年7月1日～H19年9月30日

プロジェクト主査：土田知也

プロジェクトメンバー：修士1年生：稲田祐介、学部4年生：齊藤 友、学部2年生：福田龍一

○開発の背景

当初、この受託事業は蛍光物質を封入したアクリルパイプとLEDを使用して、演出効果の高い卓上ライトを開発して欲しいとの依頼であったが、依頼主の要求に沿ったデザイン提案を経て数回の話し合いを重ねるうちに、当初の依頼内容では市場性のある商品開発は難しいとの結論に達した。

急遽、LEDライト以外で和田助製作所の販路に合致した対象を検討した結果、ワインクーラーのデザインには伝統的なものしかなく、モダンなインテリアのレストランに合うようなものが無いことが明らかになった。そこで、発熱が少ないLEDを組み込んで演出的要素を盛り込んだ、モダンなデザインのワインクーラーを開発することとした。

なお、本受託事業の窓口となったのは八木澤技術士事務所であったが、商品開発の目的はホテルを中心に飲食関係で使用する各種用具を製造販売している、

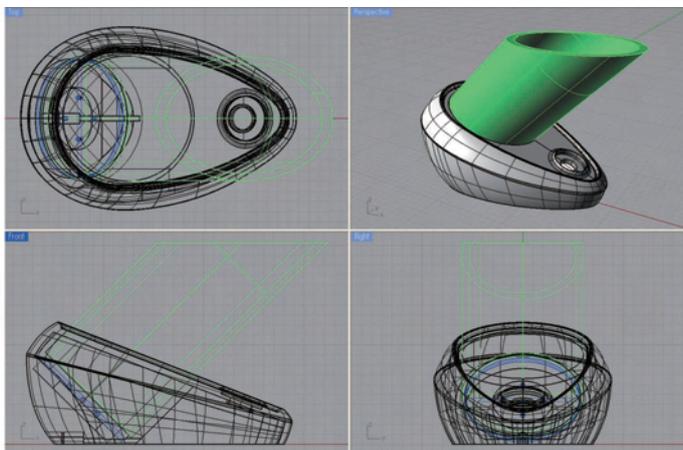
（株）和田助製作所の新商品開発にあった。

○デザイン案について

・モダンでシンプルなデザイン ・高級感があること
・LEDライトを演出的要素を持たせて組み込むことなどを前提に、デザイン案の検討を行った。数案のデザイン提案をラフモックとスケッチによって行い、イメージ及び使い勝手の確認の後、選定案をベースに電気系の処理、製造方法などの検討を行った。

本体はアルミ鋳物でアルマイト処理、電気系のパーツは極力既製品を流用することなどを確認した。また、スイッチの部分に各ホテルのオーナメントをはめ込むこと、アクリルパイプの縁が底面に仕込んだLEDライトで光る構造とした。

その後、3DCADで製作したデータから試作品を製作し、東京ビッグサイトにて3月に行われたホテルレストランショーに出品された。



受託事業名：

工業デザインのコンサルタント指導

発注者： 齋ニイガタマシンテクノ (NMT)

受託期間：平成19年4月1日～平成19年9月30日+平成19年10月1日～平成20年3月31日

プロジェクト主査：松丸 武

プロジェクトメンバー：

●はじめに

今年度も昨年度に引き続き契約を継続していただき、毎月1回工場に伺って、技術者とのデザイン会議を重ねてきた。株式会社ニイガタマシンテクノは、「高精度、高剛性、高速」の横型マシニングセンター、複合マシニングセンターと、「成熟のメカニズムと革新の制御技術を搭載した」射出成形機の2本の柱を持つ。それらは組織としては別の課で開発を進めているが、デザインの会議には両課の技術者の課長以下直接の担当者までが一緒に参画し、建設的に情報を提供し合っている。素晴らしい開発環境といえる。

昨年報告書にも記したが、このような生産財のデザインは消費財のデザインとは異なり、機能、性能、効率、他社との差異化が優先される。機種ごとの技術上の特徴をデザイナーが十分理解し、その上にデザインとしてプラスできる点を加え、機械の造形、使用者(オペレータ)の使い勝手(インターフェイス)、設置環境への提案性、経済性・価格面への配慮、他社の動向等の様々な要素を念頭に置いてのバランスを取っていくことになる。

開発を共にさせていただいて大分時間を経たからだろう、徐々にではあるがデザイナーの考えていること、できることが理解していただけるようになってきている。

しかし、まだまだデザインの先端を行く完成度に至るには遠く、提案していくことは多いと考えている。

今年度行った主なデザインワークを以下に掲げる。

●操作銘板のリファイン

最大限の自動化、集中管理がなされている現状では、機械のデザインは、マン-マシンインターフェイスが集中する操作盤のデザインと、加工ワーク等の出し入れ(加工品の出し入れ)、メンテナンスを安全にわかりやすい状態で効率よく進められることが最優先のテーマで、次に、それと関連した作業とのスムーズな関係、そして、その機械が据えられる工場等の環境(周辺)の作業者の安全・清潔・快適性等への提案であると考えている。

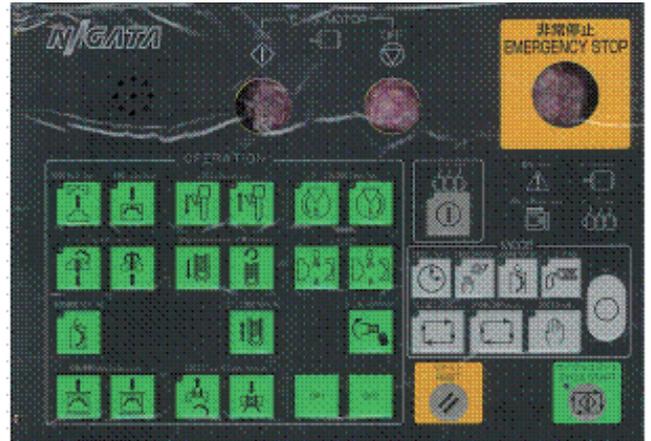
NMTにおいても、基本的なこの部分にどのような提案ができるかが、当面の課題と考えている。

大小いくつものデザインテーマが挙げられ、そこに

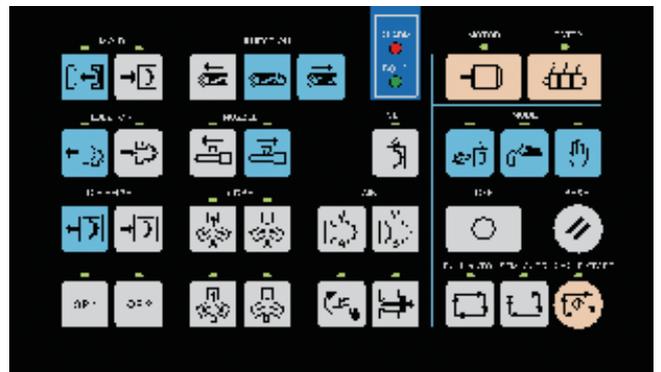
デザインとしての一貫性を持たせた中での提案をし、具体化していく中で詳細指定までを行っているが、ここにはその一部の提案内容を掲げる。

◇マシニングセンター操作盤の捜査表示デザイン

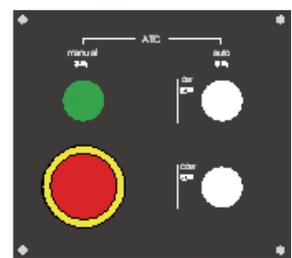
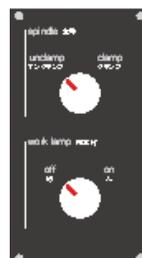
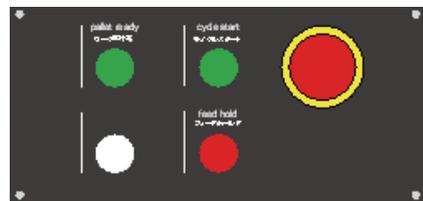
↓リファイン前

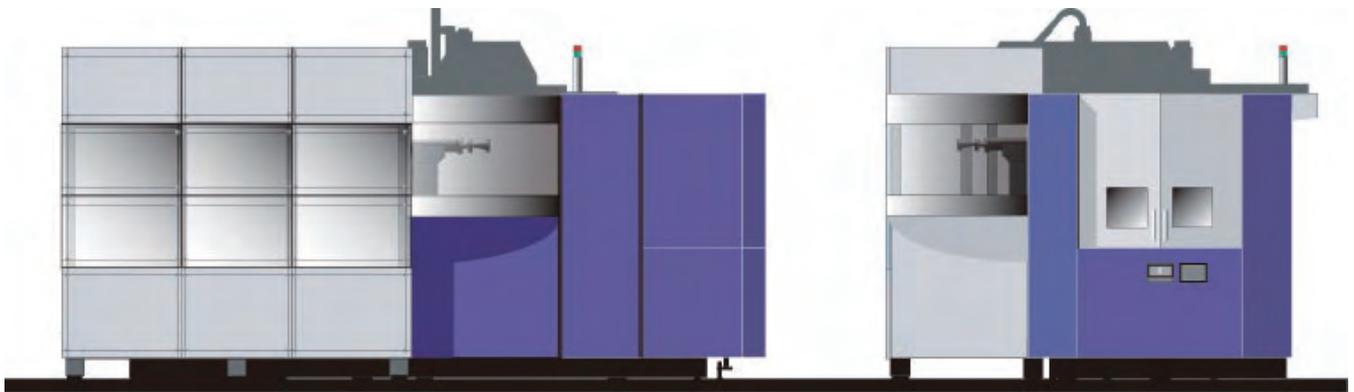


↓リファインデザイン後



↓機器内操作盤リファイン案の一部





↑マシニングセンター ストラット部変更に伴うデザイン案の一部

●マシニングセンター新機種のデザイン

マシニングセンターは、技術面でストラット部の新規化という新規デザインのチャンスに上図のようなデザイン案を提案した。

来年度の機械工作機器展（JIMTOF）での発表もあり、工具収納部の新規化であることを強調したデザイン案とした。ストラットイブをポリカーボネートの色透明（クールグレー）の板材で明快に新規制を見せ、新しいイメージをつくらうと試みた。従来からの外装と調和し、一体感のあるマシニングセンターとなったことで、新鮮さとともに信頼感も表現できたと思っている。

●射出成型機のデザイン開発

デザインアドバイスということも多くテーマがあげられるが、外観のデザインとともに、ブランド、品番等の表示デザインは機械の品格の表現として重要な要素である。

ブランドは決められているが、品番の書体、寸法、色彩、表示位置、表示方法等については統一されていない現状なので、その統一化の方向への作業も進めている。まだ明文化には至っていないが、できるだけ早く製品全体像をつかむ中で、一定のマニュアル化をしたいものと思う。

以下の図のような案を具体化しながら検討を進めている。

射出成型機は機械全体のデザインが一つの統一感を持ったシリーズ感が出来つつあり、他社との差別化されたNMTイメージが作られつつある。

この流れの中での次のテーマは、より品位の高い表現だと考えている。板金の細部の仕上げ、外装素材の吟味、塗装の質、表示の質等により考慮していきたい。

MDVR150Xi5.7

MDVR100Xi2.2

MDVR75Xi1.4

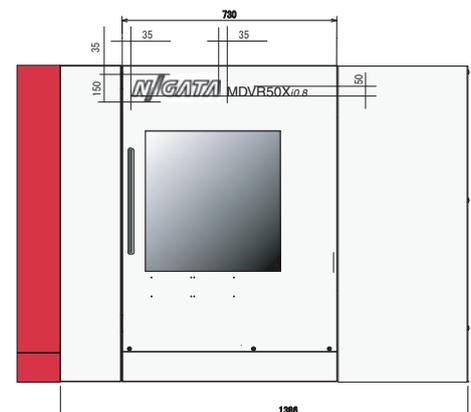
MDVR50Xi0.8

HELVETICA regular

↑書体案

↓表示位置案

MDVR50Xi0.8





【第37回機械工業デザイン賞 審査委員会特別賞】受賞
 縦型射出成型機 MDVR10

●昨年度開発のマシニングセンター

【第37回機械工業デザイン賞審査委員会特別賞】受賞

昨年度開発のマシニングセンター（上図）を日刊工業新聞主催の第37回機械工業デザイン賞に応募し、表記の賞を受賞した。産学連携の大きな成果でもある。デザインが企業の信頼性を示す大きな経営資源として認識され始めている昨今、ますますこの認識を進めてほしい。

●電動縦型射出成形機の新規デザインのその後

縦型射出成形機は、機高は高くなるが据付面積が横型の半分程で、インサート成形が容易になる、機械と金型の精度・耐久性に優れ精密成形に有利、自動化装置（ロボット）の取り付けが容易、等々の特徴を持つ。

昨年度の提案がいよいよ実機になり、現場で細部まで検討を重ね、次ページのような完成に至った。

○【第38回機械工業デザイン賞商工会議所会頭賞】受賞

日刊工業新聞主催の第38回機械工業デザイン賞に応募し、昨年度に続いて表記の賞を受賞した。

以下にその申請時に株式会社ニイガタマシテクノ技術部機械設計課が作成した、デザインの特徴を掲げる。

●NMT 縦型射出成形機 デザインの特徴

①よりシンプルで、より明るい、斬新で美しい・・・縦型射出成形機の原型を追求

本機のデザインでは、まず安全そしてインターフェイスへの配慮から、単純明快な形状で判りやすく使いやすさを追求した。加えて、配色などで工場内設置環境を明るく清潔にを追求した。結果、斬新で美しい、縦型射出成形機の原型といえるデザインが生まれた。

②安全性・清潔感へ配慮したデザイン

外装カバーパネルの塗装色を、白に近いライトグレーとし、設置される工場環境が明るくなるよう配慮した。これは清潔感、安全性に繋がるとともに、精度感も強調されることになった。

③アンバランスなトップヘビーを解消、縦型の斬新なデザイン

従来から上部の射出部カバーのアンバランスなトップヘビーがデザイン上の課題であったが、カバーに大きなRの曲面を採用することで、作業員への過大な圧迫感を軽減した。また、これがコンパクトで軽快さのある斬新な機器イメージをつくった。

④インターフェース（操作の頻度）を考慮した色彩

インターフェイスの密度が高い操作ボックス色（落ち着いた赤）を強調、密度の低い他の部分は中間色（環



【第38回機械工業デザイン賞 商工会議所会頭賞】受賞
 縦型射出成型機 MDVR10

境になじむ色)とし、インターフェイスの密度を明確にした。

⑤一体感のあるデザイン

射出部と型締め部の連結部のか細さが上下を二分してしまうような不安定感があったが、機能の構造的な面からも改良強化された結果、外観的には華奢なイメージを払拭し、安定感がアップされ、一体感が増した。

⑥安心感、シンプルを追求したマシンボディレイアウト

従来、安全扉などのカバー類と同一平面上にあったマシンボディの表面を一段奥にし、作業者にとって安心感を増すレイアウトとした。同時に、表面に見える余計なラインをなくし、シンプルにした。

⑦操作ボックス・スイッチボックスを機器の左右側面どちらにも設置できる形に一本化

操作ボックス・スイッチボックスは、工場内の機器レイアウト(設置場所)によって、機器の左右どちらかの側面に固定されるが、従来はそれが側面ごとに別々なボックスとして設計されていた。それを一本化し、

どちらにも装着できる、統一感のあるデザインとした。スイッチボックスには注意銘板を貼る事で作業者からより見やすく、判りやすい安全なものとした。

⑧明るく清潔感があり、工場に調和する色彩計画

マシンボディは濃いグレーとして、インターフェイス上直接関係のない細部形状はブラックアウトした。単純明快な安全で操作しやすい機器であることを表現するとともに、重量感を持たせ、全体の安定感を強調した。

⑨メンテナンス性も十分考慮

交換頻度の比較的高い電装品の収納ボックスをアクセスしやすい位置・高さに設置しメンテナンス性を向上した。

⑩成形作業全体のモノの流れや機器配置を考慮したデザイン

機械背面を解放し、成形品の取り出しロボットやコンベア等が自由に配置できるようにした。またパレットの投入、金型の交換作業等についても考慮している。

受託事業名：

異素材ミックス（ニットと布帛の複合）による製品の開発

発注者：栃尾織物工業協同組合

受託期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日

プロジェクト主査：鈴木均治

プロジェクトメンバー：

委託内容

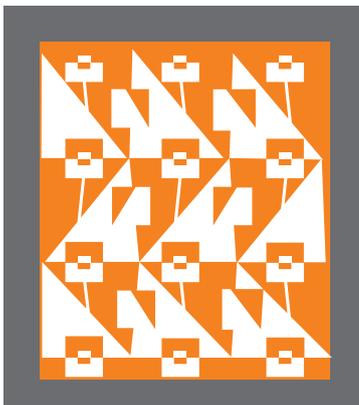
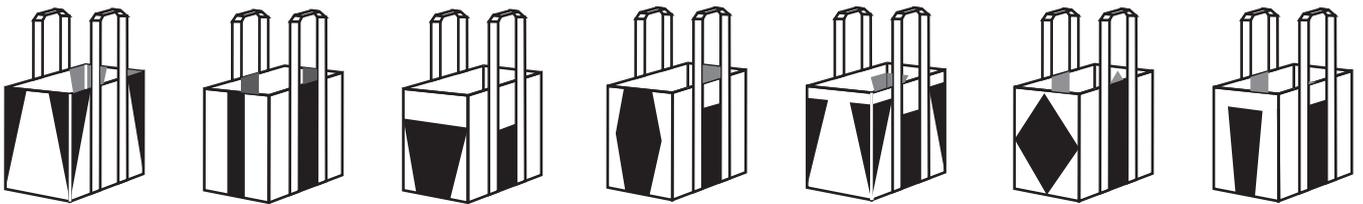
長岡市が補助する産学協同事業の一環で栃尾織物工業協同組合より栃尾ブランドのPRを目的とする産地布を使用した小物製品デザインの依頼があり業務を行った。

経緯・イメージ

布帛とニットの異素材をミックスし「見たことのない」をキーワードに新感覚のデザインを試みた。小物製作については栃尾ブランドのPRを主とする為、布帛とニットの素材特長を前面に出すことに重点を置いた。アイテムとしてはピローケース・ランチョンマット等候補もあったが、最終的にバッグ製作に至った。

このバッグの特徴は、トートバッグの形態をベースに、一部（側面）に伸縮素材であるニットを使用していること。その容量は小柄ながらも素材の特性から最大時で約1.3～4倍となる。

しかしその大きさは、口周り84センチ、深さ18センチと手軽で、折り畳んで携帯するにも邪魔にならず、ふいの買い物時に対応する。布帛部分には明るい青色、ニット部分には白地に青に対比するオレンジ色の模様で伸縮部分を強調した。



ニットパーツのデザイン



未収納時



収納時

受託事業名：

にいがた狼煙プロジェクトのぼり制作業務

発注者：新潟県観光復興戦略会議

受託期間：平成19年9月1日～平成19年10月31日

プロジェクト主査：鈴木均治

プロジェクトメンバー：

委託内容

新潟県観光復興戦略会議より、震災復興を祈念する狼煙リレーの各々の会場に使用する「のぼり」の依頼を受け業務を行った。

コンセプト・イメージ

のぼりのシンボルとしての意味を明確に表すため、注意価値および視認性を意識し、赤と白を背景に、黒で山に上がる狼煙のイメージをかなの「のろし」をくずし表現した。



採用デザイン



サイズ 450×3000

受託事業名：

日赤千秋会キャンペーンポスター制作業務

発注者：日赤千秋会

受託期間：平成19年10月29日～平成20年3月31日

プロジェクト主査：長谷川博紀

プロジェクトメンバー：

1. 依頼概要

クライアント：日赤千秋会

制作物：ポスター

サイズ：A1縦

点数：6枚

掲示場所：日赤病院内科診療待合室の壁面。

1.1 日赤千秋会概要：

日赤病院かかりつけの糖尿病患者同士のコミュニケーション団体。厚生労働省が管轄する全国組織の一環。

現在会員は150名。同じ病を持つもの同士、励ましあい、進行防止等の情報交換を行っている。

1.2 ポスター制作のねらい：

日赤病院の内科を訪れる糖尿病患者に対して入会を促す。

1.3 盛り込む内容：

ヘッドコピー「千秋会に加入しませんか」

サブキャッチコピー「糖尿病に関心のある方ならどなたでも入会できます。」

ボディコピー

「千秋会に入会すると！

会誌「さかえ」が届きます（最新情報を知る良い機会です） 食事会…4月、7月、12月／交流会9月等の催しものがあります。

千秋会の年会費は3,000円です

千秋会に入会を希望される方は看護師に声をおかけください。」

2. 作業概要

千秋会の依頼を受けて学生を対象にポスターの原画を公募しその中から候補を千秋会の皆さんに選んでいただき、レイアウトしたものを納品した。その間、数回のプレゼンテーションを行った。

2.1 原画応募概要

パレット（学生向け掲示板）を通して告知を行い作品を募った。以下、パレットに掲載した要項内容。

日赤千秋会ポスターのための原画を募集します。

1. 制作物：

日赤千秋会への入会を促すポスターの原画（絵）。

2. 日赤千秋会とは：

日赤病院の糖尿病患者同士のコミュニケーション団体。

患者同士が励ましあい情報交換の場を持ち、明るい生活を実現することを目的としています。

3. ポスター掲示について：

日赤病院内。

4. スケジュール：

応募締め切り。1月21日(月)。

5. 提出場所：

3階322研究室（長谷川博紀研究室）研究室前に箱を設置しておきます。

6. 作品のサイズ：

A3（ヨコ297mm×タテ420mm）イラストボードかイラストボードに貼った状態で提出。

必須※ボードの裏面に学籍番号と氏名・携帯番号・携帯メールアドレスを記入してください。

7. 留意点：

明るく、活力に満ちた絵を自由な発想で描いてください。抽象的なものでも結構です。

8. キーワード：

つながり・夢・希望・生命・長岡・風景・四季・人々 etc.

備考：

- ・6点採用します。1点2ヶ月掲示。複数点応募も可。
- ・ポスターのデザイン、文字レイアウトは研究室で行います。
- ・応募者は原画（絵、イラストレーション）のみ制作してください。
- ・作品はトリミングして使われる場合があります。
- ・視覚デザインの学生はふるって応募してください。
- ・問い合わせ先 hhasegawa@nagaoka-id.ac.jp

2.2 ポスター制作

公募作品から本学学生、金子容子、小山 美里、杉本明希恵、平井 優、前澤裕樹、結城 輝6名の作品を選出しポスターを制作。A1サイズで出力しパネル

仕様にした。

3. まとめ

以上の行程を経て、千秋会会長櫻井守様に納品した後、日赤病院内に掲示。大筋において順調に業務が遂行できた。クライアントの評判も良好であり、参加した学生への教育的効果も得られた。

受託事業名：

みしま中央保育園園旗デザイン制作業務

発注者：社会福祉法人はなみずき福祉会

受託期間：平成19年10月29日～平成20年3月31日

プロジェクト主査：長谷川博紀

プロジェクトメンバー：天野 誠

1. 依頼概要

クライアント：社会福祉法人はなみずき福祉会

制作物：みしま中央保育園園旗デザイン

点数：1点

1.1 みしま保育園概要：

開設：平成3年、三島町の要請により公設民営開園
(土地は三島町からの貸与)

園長：櫻井比呂子

理事長：櫻井守（平成18年まで長岡市議会議員、議長
経験があり現在長岡市消防団団長）

場所：長岡市三島町

1.2 園旗デザイン制作依頼内容：

- ・園旗は、日章旗・長岡市旗と同時に掲げる。
- ・園旗デザインではあるがCIデザイン（マーク）と
考えれば良い。
- ・旗自体の色指定も含む。
- ・三島に因みながらもモダンなデザインを希望。
- ・意匠登録は依頼元が行う。
- ・完成希望：平成20年の入学式。

2. 作業概要

園長、理事長からヒヤリングをおこなった。タイプ
の異なる複数案を提示し方針を定め、方針に基づき案
を絞り更に修正を加えた。修正案を提示し決定した後、
決定案の作図とカラーサンプルを納品した。

案については学生を対象に公募しその中から候補を
層別しクライアントに提示した。

2.1 デザイン募集概要

パレット（学生向け掲示板）を通して告知を行い資
料を配布して作品を募った。以下、内容。

みしま中央保育園シンボルマーク・園旗デザイン募集 要項。

1) クライアント：

社会福祉法人はなみずき福祉会 三島中央保育園

所在地：〒940-2314 長岡市上岩井6826番地

2) 制作物：

同保育園のシンボルマークと旗のデザイン。

3) 著作権について：

意匠権を含む権利譲渡契約になります。

4) 締め切り：

2008年1月21日(月)。

5) 提出場所：

2階206研究室（別紙「シンボルマーク案の提出方
法について」参照）。

6) 提出方法：

（別紙「シンボルマーク案の提出方法について」参照）。

7) 審査について：

応募作品の中から第1次審査を行います。通過した
方は第2次審査用のダミーを制作してもらいますの
で、指示を仰いでください。第2次審査の中から最
最終的に採用案を決定します。採用者は印刷用のデー
タ作成をお願いすることになります（別途指示しま
す）。

8) シンボルマークに求めること：

子供たちにもわかりやすいもので、地域性を活かし
たデザイン。

9) クライアントからのコメント：

- ・保育目標をコンセプトにする。→「明るい子・や
さしい子・考える子」
 - ・地域性を活かす。→「三つの山」
 - ・保育園のイメージカラーは薄いブルー
- 上記の内容はあくまで参考意見ととらえてください。

2.2 シンボルマーク開発の方向性

応募要項とともにシンボルマーク開発の方向性を学
生に示した。以下、内容。

下記項目はシンボルマークを制作する上で参考とな
る考え方の例です。

1) 目指す保育像：

- ①恵まれた自然環境の中で、のびのびと遊び小動物や
植物、砂、土、水とのかかわりの中で生き生きと活
動できるよう導き人間性を培う。
- ②安心して子育てができるように家庭、保育園、地域
社会それぞれがその役割を認め合い、子育ての支援

をする。

2) 作業課題：

みしま中央保育園のイメージの核となり、目指す保育園像にふさわしいシンボルマークを開発する。

3) 留意点：

- ①子供たちにわかりやすいもの
- ②地域性を活かす
- ③シンボルマークを作るのは今回が初めてであること

4) イメージクライテリア（拠り所）

シンボルマークのイメージを検討する上でヒントとなるキーワード。すべて使うということではない。

- ①先進性・未来感：シャープさ／ネットワーク
 - ②躍動感・活動感：ダイナミック／パワフル／発展性
 - ③新しさ・創造性：期待感／斬新さ／感性力
- 以下省略。

5) 機能クライテリア（拠り所）

シンボルマークに必要な機能性。すべて使うということではない。

- ①独自性・独創性：他にはない個性・オリジナリティ
- ②記憶性・印象性：図形想起力がある
- ③視認性：様々な環境において判別しやすい
- ④耐久性：あきない、普遍性
- ⑤展開力：いろいろなアプリケーションに展開しやすい
- ⑥再現性：想定される媒体に正しく表示できる

6) 表現方法

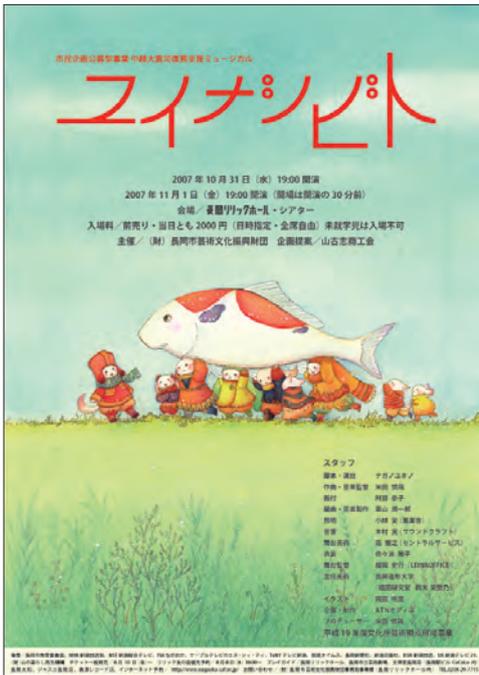
シンボルマークを造形化する上でのヒントとなる表現。すべて使うということではない。

- 点・線・面 重ねる・だぶらせる ずらす・繰り返す 切る・離す 加える・つなぐ
伸ばす・まっすぐにする 以下省略。

3. まとめ

以上の行程を経て、はなみずき福祉会理事長櫻井守様にみしま中央保育園園旗デザイン最終案を納品した。大筋において順調に業務が遂行できた。クライアント

の評判も良好であり、参加した学生への教育的効果も得られた。



長岡公演
ポスター、フライヤー
(フライヤーのみ裏面あり)



東京・長岡公演
共通プログラム

受託事業名：

にいがた狼煙プロジェクトマップカレンダー制作業務

発注者：新潟県観光復興戦略会議

受託期間：平成19年9月1日～平成19年11月30日

プロジェクト主査：福田 毅

プロジェクトメンバー：

●業務の概要

「にいがた狼煙プロジェクト」とは、新潟県中越地震（2004年）及び新潟県中越沖地震（2007年）からの震災復興並びに観光復興を祈念し、狼煙上げを行うことで中越地方へのエールを送るとともに、新潟県の“元氣”を県外へPRする地域参加型イベントである。

当該イベントでは、県内各地の山城・砦跡等から狼煙上げを行い、地域の方々からその様子を写真や図画として収める企画（狼煙写真・図画コンクール）が行われ、本業務は当該企画の参加者に配布する景品のマップカレンダーを制作した。

【狼煙プロジェクトの概要】

実施日／2007年10月20日(土)

場 所／新潟県下約100地点

参加者／約1600人

●制作条件について

マップカレンダーの制作にあたり発注者より以下のとおりデザイン条件が付された。

- ・新潟県全体の一体感、県民の輪
- ・「震災からの復興」に向けた活力
- ・狼煙リレーから生まれる人々のつながり
- ・観光の振興

●制作物について

マップカレンダーの地図には古地図（越後全図並佐洲図／1817年出版）を使用し、その上に各地の狼煙上げ地点を落とし込み、遠く離れた人への情報伝達手段として狼煙上げを用いていた当時の雰囲気表現した。また、各地の狼煙上げの様子を撮影した写真をレイアウトし、記念に残るカレンダーに仕上がった。



受託事業名：

おりなすブランドマークデザイン制作業務

発注者：財団法人栃尾織物協会

受託期間：平成19年11月9日～平成20年2月29日

プロジェクト主査：鈴木均治

プロジェクトメンバー：

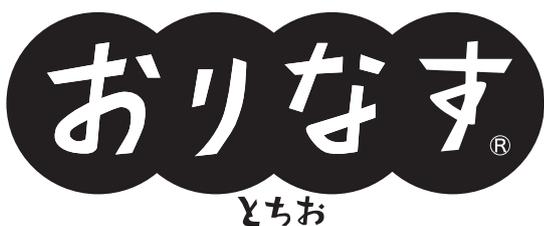
委託内容

栃尾織物工業協同組合より「おりなす」の商標登録に伴い、タグデザインに依頼があり業務を行った。

コンセプト・イメージ

「おりなす」は既に地元の産業交流センターの愛称として使用され、その意味は栃尾の織物や産業、私たちの未来、人と人の交流・連携…を織り成していくという期待が込められている。

当初は特に字体等の制限は無かったが、「おりなす」という言葉の響き、織物の柔らかかつしなやかな印象にはかな文字が馴染むと感じ表現した。



受託事業名：

新規ブランドマークデザインおよびそのアプリケーションデザイン

発注者：株式会社難波製作所

受託期間：平成19年4月1日～平成19年7月31日

プロジェクト主査：松丸 武

プロジェクトメンバー：

●はじめに

株式会社難波製作所は、工作機械、産業機械の安全保護カバー・角パイプ、アングル等の架台・ブラケット類、レーザー加工品（切断品）・SUS、アルミ製品の溶接加工およびその焼付塗装を行う会社である。難波社長は、「創業30周年を目前に控え、次代への飛躍を求めている様々な規格の一環として、新たなブランドイメージを作りたい」とのお話で依頼があった。

ブランディングが大きな経営資源として認識され、多くの企業が関心を寄せる状況になった今日とはいえ、難波社長がいち早くそのデザイン作業に取り掛かろうとしたこと、まず意識と意欲に大きな期待を寄せながらデザインを進めた。

ブランディングは今一つのブームのように様々な視点で語られるが、この企業のブランディングを一言でいえば、その企業独自のスタンディングポイントを明確にし、その理念を、企業が産む製品、視覚化されるメディアをはじめ、作業環境、社員の意識、会社が行うすべての活動を明確なイメージで統合し、それを時間経過のなかで柔軟に対応させ、浸透させていくことといえる。これは企業の信頼性や発展性を持った品位あるイメージを作り上げつつ継続されていく中に打立てられる経営価値である。

このプロジェクトではこの考え方の基底となるCI（Corporate Identity）確立への第一段階として、社長にVIS（Visual Identity System）の考え方をお話させていただき、並行して、ベーシックエレメントである社名ロゴ、ブランドマーク、そのシグネチャをデザインし、アプリケーションシステムとして名刺と社用封筒を提示した。

対外的な面、社員の意識や理解にかかる面などの多くの要素は長い時間がかかって認識され定着していく要素であるので、その価値評価はなかなか出にくいですが、常にこのブランディング高揚の意識を持ち、情勢に照らして変化させながら企業価値として定着させて欲しいと思う。

社長と話を重ねながらデザイン提案を行い、案の中から後に掲げるデザインを決定した。

●ブランドマーク・社名ロゴのデザイン

難波製作所の理念には、前述の製品の製作にあたり、「クライアントのどのような要望に応え、喜んでいただけるべくチャレンジ精神で望む。そこに技術革新および信頼性を生んでいく」という内容を掲げている。この理念が、果たして視覚媒体として表現されているかということ、残念ながらそうとは言えない。

次に掲げるのが現在のブランドマークと社名ロゴであるが、失礼ながら、時代観、歴史観はあるとは言え、最新の技術を売りにする企業のものには程遠い。

提案では、この際全く新しいイメージを作ることと考えていった。現状のイメージを大きく変えることが飛躍ととらえられるよう、先端技術で信頼性を築く、クライアントにはもちろん、社員にも、また環境にもやさしい企業像を表す「難波製作所の顔」を模索した。



株式会社 難波製作所

使用していたブランドマークと社名ロゴ

●提案のブランドマーク・社名ロゴと使用例

「クライアントのいかなる要望にも先進の技術と創業時から磨きぬいてきた技能で応えていくチャレンジ集団」、「製造業の規範となる明るく清潔な社風」、「地球にも優しくを考える企業」である難波製作所のシンボル化として提案した十数案の中から、最終的に以下のような案が選ばれた。



新たに選定されたブランドマーク



株式会社 難波製作所

社名ロゴとシグネチャ例



株式会社難波製作所

代表取締役
難波 博

新潟県長岡市福道町前田804番地
電話(0258)27-5161 FAX(0258)29-2326
e-mail: h_nanba@sa2.so-net.ne.jp



代表取締役
難波 博

株式会社難波製作所
新潟県長岡市福道町前田804番地
〒940-2053
TEL(0258)27-5161
FAX(0258)29-2326
e-mail: h_nanba@sa2.so-net.ne.jp

名刺案 (ヨコ/タテ)



株式会社難波製作所

新潟県長岡市福道町前田804番地
TEL.(0258)27-5161 FAX.(0258)29-2326
<http://www.nanba-ss.co.jp/>

NCT/ベンチング加工
精密銑金加工
製缶溶接加工



株式会社難波製作所

新潟県長岡市福道町前田804番地
TEL.(0258)27-5161 FAX.(0258)29-2326
<http://www.nanba-ss.co.jp/>

NCT/ベンチング加工
精密銑金加工
製缶溶接加工

封筒案

受託事業名：

「大根立て」による切干し大根製品パッケージデザイン

発注者：株式会社大沢加工

受託期間：平成19年12月1日～平成20年3月31日

プロジェクト主査：鎌田豊成

プロジェクトメンバー：デザイン研究開発センター研究員：近藤修一郎、矢尾板和宣

●概要

本プロジェクトは、株式会社大沢加工が中心となりおこなっている『魚沼の大根立て』に雪中保存された大根から作られる切干し大根のパッケージデザイン業務である。『大根立て』は秋に収穫された大根などの野菜の状態を良く保つことができる雪国の伝統的な野菜貯蔵方法である。雪中保存された大根は甘みが増すなどの効果が得られる。

条件として、①製造の特徴をパッケージデザインに反映する。②製品のビジュアルアイデンティティを確立する。③環境問題に配慮したパッケージデザインをおこなう。以上が求められた。

●過程

【雪中貯蔵大根を使用した商品】をブランド化するために、商品のネーミングと共に以下のビジュアルデザイン案を提案した。イラストを主に使用した案と、書を主に使用した案の2パターンになった。



大根立て



魚沼地方独特のイチヨウ葉形の切干し大根



・イラストを主に使用した案



・書を主に使用した案

2つのパターンの中で、イラストを使用した案でパッケージデザインをおこなうことに決定した。イラストは、江戸時代に農作業のマニュアルとして使われていたと考えられる「南部絵暦」と、雪国の生活をあらわした「北越雪譜」を参考にして制作した

その後、パッケージにかかるコストや環境問題に配慮すること、商品保護などを考慮して、3タイプの案を提案した。

●成果

最終的にC案に決定した。

この商品は手間のかかる製造法のため、生産量が確保された段階で、当該パッケージが使用される予定となっている。



A 巻き紙タイプ



C クッション付四角形箱タイプ



B 六角形箱タイプ

受託事業名：

アルビレックス新潟の選手を起用したCM制作業務

発注者：株式会社新潟日報社

受託期間：平成19年4月1日～平成19年4月30日

プロジェクト主査：鎌田豊成

プロジェクトメンバー：非常勤講師：瀧 純男、平成19年度視覚デザイン学科4年生

●概要

本プロジェクトは、新潟日報社がユニフォームスポンサーを務めるサッカーJ1リーグ・アルビレックス新潟の選手を起用し、当社のPRを目的としたCMを制作したものである。当該CMはテレビ、東北電力ビッグスワンスタジアム、JR新潟駅メディアステーションなどで放送することを前提として制作することとなった。CM制作は、平成19年度の視覚デザイン学科4年生の協力を得て、3グループに分かれて各グループから1つずつ成果を出し、その中から採用映像を決定する方法にて進められた。

●制作条件

制作にあたり発注者よりいくつかの制作条件が付された。

- ・ターゲット：スタジアムサポーター、新潟県民、アルビレックス新潟ファン
- ・映像の長さ：15秒
- ・若さ、スピード、スポーツ、新鮮といった要素を盛り込み、「若い力」「スピード感」のある映像で表現すること。

- ・サッカーのスピード感や力強さと新聞報道の迅速性や信用性を関係付けること。
- ・新ユニフォームの導入時期ということでユニフォームを強調すること。

●成果

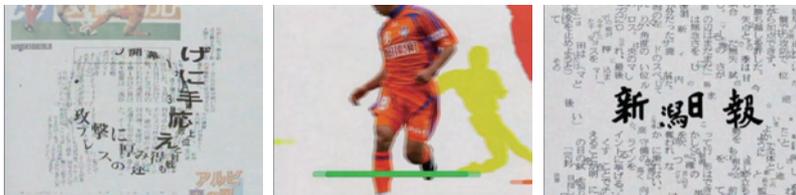
各グループの成果として以下の3つの映像が出揃った。

- ・タイプA 「興奮そのままに篇」
スタジアムを吹き抜ける興奮の風が新聞紙面にそのまま息づいている様を表現した。
- ・タイプB 「情報のボール篇」
新聞紙面が情報のボールとなりサッカーボールのように駆け巡る様を表現した。
- ・タイプC 「はばたく挑戦篇」
ビッグスワンのはばたきのような飛躍と挑戦を表現した。

上記成果のうち、発注者との協議によりタイプCが採用されることとなった。タイプCの映像は実際にテレビやスタジアムなどで広く放送され好評を得た。



Aタイプ「興奮そのままに篇」



Bタイプ「情報のボール篇」



Cタイプ「はばたく挑戦篇」(採用映像)



中間プレゼンテーション風景

受託事業名：

鯛車復活プロジェクト

発注者：巻観光協会

受託期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日

プロジェクト主査：澤田雅浩

プロジェクトメンバー：デザイン研究開発センター研究員：野口基幸



2007.3.22 モスバーガー主催 ワクワクタウン大作戦報告会

2005年に鯛車の活動がモスバーガー主催のまちづくりコンペで入選し2006年の1年間、活動支援を受けていましたが、その報告会のプレゼンテーションがモスバーガー本社で行われました。



2007.3.18～7.29 一般者向け鯛車ワークショップ

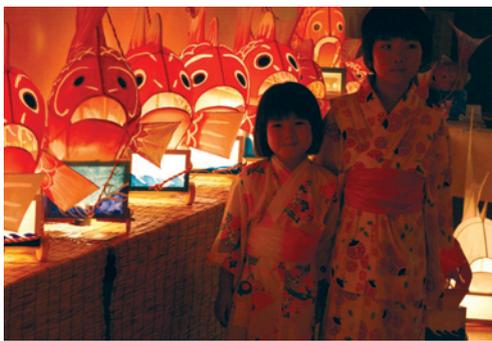
一般の方を対象にした鯛車の制作教室を行いました。親子連れから夫婦で参加された方、また90代の高齢の方まで実に幅広い年代の方が集まり、鯛車という一つの共通点から年代の壁を越えたコミュニケーションが生まれました。教室を通じて町の人々の交流の場ができていくことに教室を続けることの大切さを実感しました。



2007.7.25～8.28 巻南小学校 鯛車ワークショップ

巻南小学校の5年生が夏休みで自主参加にもかかわらず50名も集まりました。8日間に渡り個性的な鯛車を熱心に作り上げました。





2007.8.11～8.16
鯛車展

巻町に残存する鯛車と小学生、一般の方が作った鯛車、合計50台を展示しました。昨年よりお盆の13日に鯛車の貸出しを行っています。徐々に浸透しつつあり、今年は貸出しに順番待ちができるほどでした。



2007.9.12
松野尾小学校鯛車ワークショップ

巻の松野尾小学校の6年生を対象に鯛車の歴史の学習、ペーパークラフトを作るワークショップを開きました。短い時間の中で子供たちが真剣に取り組む姿がとても印象的でした。



2007.10.13
巻南小学校鯛車修復作業

2005年から巻南小学校でワークショップを開いており、今までで70台の鯛車が完成しました。学校の目玉として様々なイベントに登場し痛みの激しい鯛車がたくさん出てきたため学校側から修復の依頼があり、メンバーで修復作業を行いました。

2007
鯛車復活
プロジェクト
越後巻の
鯛車



受託事業名：

長岡東山福祉会新拠点施設建設プロジェクト「新拠点施設実施設計業務」

発注者：社会福祉法人長岡東山福祉会かつぼ園

受託期間：平成19年6月13日～平成19年10月20日

プロジェクト主査：新海俊一

プロジェクトメンバー：長岡造形大学コクーンプロジェクトチーム 新海俊一（建築・環境デザイン学科准教授／総括、建築計画・設計）、飛田範夫（同教授／造園）、藤澤忠盛（同准教授／インテリアデザイン）、星野新治（研究員／ランドスケープデザイン）
株式会社ワシツ設計 小森匠（建築設計）、小林真人（構造設計）
有限会社松田設備設計 松田隆幸（設備設計）



(写真 松本明彦)

■プロジェクト概要

作品名称	COCOON（コクーン）
施設名称	ケアセンター花の里かつぼ
基本設計	平成17年5月～19年3月
実施設計	平成19年4月～8月
工事期間	平成19年11月～20年8月
敷地面積	9190㎡
建築面積	2009.05㎡
延床面積	2114.51㎡
主体構造	鉄骨造一部2階建て耐火建築物
設計監理	NIDコクーンプロジェクトチーム 新海俊一、藤澤忠盛、飛田範夫、 星野新治 株式会社ワシツ設計 小森 匠、小林真人、 有限会社松田設備設計 松田隆幸
施工	株式会社吉原組 相田秀樹、石坂睦夫、桑原義博 長岡電業株式会社 岩崎孝夫 新日工業株式会社 和田周一

■施設テーマ

プロジェクト名のコクーンとは、活力が衰えつつある生物を包んで保護し、滋養供給するためのカプセルのようなもの（すなわち繭）で、この施設の果たす機能を象徴している。

【コクーン（cocoon）】

- ①停止または鈍い活動状態にある動物を包み込んで保護する覆い。=繭（まゆ）
- ②1985年に公開されたロンハワード監督のアメリカ映画。舞台はフロリダの保養地で、別荘地の老人ホームに住む老人たちと『同胞の救出』という任務を帯びて地球に来訪したエイリアンたちとの交流がテーマ。

■施設概要

当新施設は新潟県長岡市郊外の傾斜地に建つ高齢者介護施設である。ユニットケア方式の認知症高齢者対応グループホーム（2ユニット、定員18名）と小規模特別養護老人ホーム（3ユニット、定員29名）で構成され、眺望デッキ、地域交流室、サンルーム（園芸室）を併設する。遠方に弥彦山を望む立地条件と、地域の特徴である園芸活動を活用し、緑豊かな自然環境の中で園芸福祉療法を展開するべく敷地内には菜園や庭園が設けられている。入所者と地域住民の園芸を通じた交流が意図され、要介護度が低い入所者は地域住民、家族とともに園芸作業に参加し、要介護度が高い入所者は四季折々に展開する風景や緑の生育を楽しむことができる。



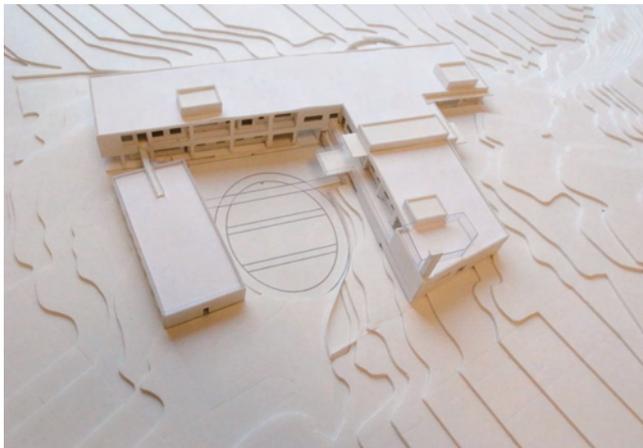
長岡造形大学コクーンプロジェクトチームは、本施設の設計と並行して、既存の特別養護老人ホームかつぼ園の中庭を拠点に「地域の庭づくり」を推進する市民活動団体「花華プロジェクト応援団」を立ち上げ、2年に渡り活動をサポートしてきた。「ケアセンター花の里かつぼ」は、ソフトとしてはこの市民活動を、

ハードとしては新施設とその庭園を活用して、園芸文化が根強い長岡市水穴地区に地域住民共有の庭の実現を目指している。

地域と自然に見守られる「花の里」はボランティアによる奉仕活動の場ではなく、入所者と地域住民が協働で緑を育む「地域の庭」となるであろう。この施設には敷地区画のための擁壁は無く、文字通り地域に開かれた庭となる。

■建築構成・配置計画

1. 本施設は小規模特養とグループホームより構成されることから、分棟配置する方法も考えられたが、職員配置や冬期降雪時の移動、傾斜地という立地条件から、最終的にグループホームの一部と小規模特養の一部を積層し、中庭をコの字型に取り囲む建物配置が採用された。



(写真提供 香川浩)

2. 敷地内には第1基準地盤（標高が低い地盤）と第2基準地盤（標高が高い地盤）が設けられ、第1地盤上にはグループホーム2ユニットと中庭、第2地盤上には小規模特養3ユニットと管理部門諸室が配置されている。
3. 性格が異なる機能が組み合わせられた複合施設でありながら、建築的に一体感を持たせるために2階の小規模特養は3ユニットをTの字型に配置して3つの枝を管理部門、共用施設、エントランスで連結し、1階のグループホームは陽あたりやユニット相互の独立性、中庭との連続性に配慮してやや離して配置されている。

4. コの字型の配置計画と、2つの基準地盤面に建つ建物を重ね合わせる断面構成により、本施設は建築基準法上、3つの建築物の扱いであるが、この構成を採用することにより、計画敷地がもたらす景観（豊かな緑と遠望される山の景観）、住環境（通風、採光）面でのメリットをもれなく享受することができる。
5. 施設の総合案内機能を果たす事務室は小規模特養のフロアレベルに設置されているが、グループホームの2ユニットには個別の玄関が設けられ、特養部門とは独立して入所者の生活が展開する。
6. 中庭を取り囲むようにコの字型に建物が配置されることにより、地域社会に対して開放的な中庭が生まれ、「地域の庭」が育つ様子が周辺住民に公開される。
7. 周囲に塀や垣根を持たず地域に開かれた庭は、季節ごとに美しく彩られ、地域社会にとってもかけがえのない財産となっていくであろう。

■色彩計画

1. 積雪地域に建つ本施設は、冬期には雪化粧した山並みの風景に包み込まれていくよう意図し、外観の色は白を基調としている。



(写真提供 香川浩)

2. 外壁は白く塗装されており、汚れが懸念されるため、降雨により汚れが流されるよう光触媒溶液が塗布されている。
3. 内装色は、深みのあるモカブラウンの家具が置かれることを考慮し、また清潔感を強調するために

外観と呼应する白を基調に構成されている。

4. 和室等の天井高が低い空間や、談話スペースのような狭小空間、入所者の居室には白に若干色味を加えた暖かみのある色彩のクロスを使用している。
5. 小規模特養、グループホームの各ユニットには、施設名「花の里かつほ」に因み、やまぶき、ききょう、はぎ、きり、かつらをモチーフとするテーマカラーが与えられている。
6. 全てのユニットのカーテンは、全室共通のレースカーテンの他に、2級遮光(95%遮光)仕様のカーテンが使用され、そのカラーはユニット毎のテーマカラーに準拠している。
7. 入所者はテーマカラーを用いたサイン看板や、室内のカーテンによって自身が所属するユニットを認識するよう工夫されている。



(写真 松本明彦)

■各部の特徴

エントランスからロビーラウンジを抜けて眺望デッキに至る線形空間は本施設を特徴づける連続的な空間である。それぞれの位置から遠景や中庭の植物、グループホームの屋上を眺めることができる。奥行き4mの眺望デッキは片持ちで中庭に突き出し、あたかも宙に浮いたように庭を見下ろす非日常的視点場を提供する。

1. エントランス

- ・自動扉を備えるエントランスからは、徒歩、車イスいずれによるアクセスでもギャップレスで入館できる。
- ・来館者は風除室を抜けると履き替え専用の空間は無く、いきなり細長いロビーラウンジに入る。来

館者は右手に事務室受付カウンター、左手に木製ベンチを見ながら、眺望デッキに出るための大きなガラス引き戸に正対する。



(写真 松本明彦)

- ・受付窓口のすぐ左側に設けられた総合案内板は、来館者が当施設の空間構成を理解し、訪問先へのルートを見つける助けとなる。
- ・エントランスでの履き替え場所は風除室とロビーラウンジの間に設けられたモカブラウンの円形フローリング仕上げ部分である。この一見すると履き替えラインが不明瞭に思えるエントランスの構成は、初めての来館者と受付職員とのコミュニケーションのきっかけとなるであろう。



(写真提供 香川浩)

- ・風除室に直結するフローリング仕上げの床は来館者に上質な室内のデザインと快適な居住環境をアピールする。
- ・フローリング仕上げ、大型のベンチ、手洗いシンクは、「ここからが住まい」という記号的役割を担っている。

- ・左の壁に沿って設けられた木製のベンチに腰掛けて脱いだ靴は、ベンチ正面の化粧パネルを手前に引くと座面下に収納することができる。
- ・受付カウンターの右側に設けられた手洗いで、入退館時に手肌を清潔に保ち、院内感染等を未然に防ぐことができる。

2. ロビーラウンジ

- ・エントランスと眺望デッキを結ぶ通路部分はゆったりとくつろげる広幅員のロビーラウンジとなっている。
- ・革張りのベンチに腰掛け、入所者やその家族、一般来館者が喫茶・談笑することができる。



- ・ロビーラウンジの壁側と中央でフローリングの仕上げ色が切り替えられている。中央は「人や車イスが通路として使用するので障害物を設置しないように」というサインである。
- ・ロビーラウンジの中央に障害物が設置されないことにより、外部からエントランスに向かう来館者は遠くの山々に向かって突き抜ける景観軸に気づくであろう。
- ・ロビーラウンジの採光窓は眺望デッキに面する大きなガラス引き戸と、吹き抜け上部側面に設けられたハイサイドライト（高窓）である。トップライト（天窗）を設けないことにより、太陽高度が高い夏はまぶしい陽射しが制限されて涼しく、高度が低い冬は日光を取り込むことができて明るさと暖かさが獲得される。
- ・ロビーラウンジは眺望デッキと地域交流室に接す



(写真 松本明彦)

- る。大きなガラス引き戸を開いて眺望デッキから遠景を楽しんだり、地域交流室と連携して、入所者、来館者が交流することができる。
- ・ロビーラウンジは廊下であって廊下でない居室の一部にもなり得る中間領域としての性質を兼ね備えている。
- ・広大な壁面は白を基調とする外観のイメージに呼応するとともに、上部にピクチャーレールを備え、イベント等の際には広い展示スペースとなる。



3. 廊下

- ・ロビーラウンジから特養ユニットA・Bに向かう通路はロビーラウンジ周辺と連続的な色彩で仕上げられている。
- ・通路の床面は中央と壁寄りで色彩が切り替えられている。中央のカラーは特定のユニットに属さない「ユニバーサルな空間（入所者、職員、一般来館者の共通利用空間）」を象徴する。



- ・手すりは歩行者、歩行器具利用者に対応し、健常者の腰高よりもやや低く設定されている。
- ・一方、壁寄り床面にはユニット内の床仕上げと同じカラーが用いられ、「入所者の空間」を象徴している。
- ・幅木の幅を広く設定し、車イスの衝突によるダメージを回避するよう工夫されている。
- ・廊下、居室、柱型などの隅角部には利用者の衝突時の安全性確保のため、木製のコーナーガードを設けている。

4. サイン計画

- ・本施設のサイン計画では、全ての部屋、空間にサインを設置するのを避け、入所者や一般来館者にとって必要な箇所のみサインを設置している。
- ・室内のサイン看板は、施設内でのパブリックな空間（事務室、厨房、検収室、研修・会議室などの共同利用空間）と、プライベートな空間（ユニット内の入所者専用の各種空間）とで仕様を分け、緩やかに利用者ゾーンを視覚化した。
- ・プライベートな空間にはピクトサイン（図的視覚要素で構成されたサイン）を使用している。
- ・パブリックな空間には文字を用いたサインを使用している。
- ・各ユニットには、それぞれテーマカラーが与えられており、ユニット玄関のガラス引き戸へのユニット名表示や室名看板にはこのテーマカラーが使用されている。
- ・小規模特養の3ユニットについては、日中、居室のドアが閉められていることが多いことから、扉



(写真 松本明彦)

に室名看板を設置した。

- ・グループホームの2ユニットについては日中でも、各入所者が部屋で過ごしたり、共同生活室で過ごしたりと様々なライフスタイルが想定されるため、壁に室名サインを設置した。

5. 眺望デッキ

- ・中庭に突き出した眺望デッキは、眼下の中庭のみならず、弥彦山をはじめとする遠景や、グループホーム屋上への眺望を確保するとともに、当施設の象徴となる良好な景観を楽しむための視点場を提供する。
- ・仕上げは耐候性と自然な木の質感を兼ね備えた人工木材を用い、入所者や一般来館者が裸足で歩行してもささくれなどで怪我をする心配がない。
- ・眺望デッキは上部に奥行き2mの庇を持ち、テーブルやイスを置いてオープンテラスとして利用することができる。



(写真 松本明彦)



6. 地域交流室

- ・地域交流室は、入所者同士の交歓やサークル活動、入所者の家族や地域住民、一般来館者、職員など様々な人々の交流空間として設けられている。



- ・ロビーラウンジや研修・会議室に隣接している。ロビーラウンジとはロールスクリーンで柔らかく区切ることができ、研修・会議室とは防音性を備えた可動間仕切りで区画できる。
- ・行事等の開催時にはロビーラウンジ、地域交流室、研修・会議室を一体的に利用することができるよう、床仕上げも共通になっている。
- ・ロールスクリーンは陽射しを避けるためのブラインドとしてばかりでなく、ミーティングやサークル活動などで使用中であることを示す優しいサインとしても活用できる。

7. 小規模特養

- ・ユニットケアを前提に計画された特別養護老人ホームで、居室は全て個室である。
- ・廊下は車イス、あるいはストレッチャーのすれ違い時にも対応できる広幅員で、天井高を抑えながらも窮屈さを感じさせない、明るく、ゆったりとした空間となっている。
- ・ユニットごとのテーマカラーを用いた標識がユニット玄関にあたるガラスの引き戸に表示されており、各ユニットの間取りが類似しているにも関わらずユニット内外から、各ユニットがカラーで識別できる。
- ・個室の室名表示板には施設職員が管理上使用する部屋の呼び名が控えめに記載されているが、入所者はもっぱらテーマカラーによって所属するユニットへの帰属意識を強めていくよう工夫されている。
- ・特養の3ユニットはいずれも中廊下型の平面形式となっており、方位や陽あたりが平等ではないが、それぞれの居室が「独自の魅力（＝優れた環境）」を持つように設計されている。
- ・共同生活室からの景色も3ユニットそれぞれで異なるが、陽あたりが良い部屋、景観が良い部屋、これから生育する桜やシンボルツリーが楽しめる部屋など、居室同様に「独自の魅力」を持つ。
- ・ユニットAの共同生活室からは中庭とグループホームの屋上、離れた街の風景や遠景を眺めることができる。
- ・ユニットBの共同生活室からは敷地南東の緑空間



(写真 松本明彦)



と南西のシンボルツリーを眺めることができ、やがて生育する桜並木を望む位置にある。

- ・ユニットCの共同生活室からは中庭のみならず、北西方向の弥彦山の景観も楽しむことができる。



(写真 松本明彦)

- ・共同生活室は各ユニットとも、ロビーラウンジと同様にハイサイドライトを備え、天窓でなく垂直面の窓から陽射しを取り入れることで、夏涼しく冬暖かい空間となるように設計されている。
- ・特養ユニットA（やまぶき）西側の3室は北西向であるが、外部に側壁と深い軒を持つバルコニーを設けることで、風通し良く、景観的に最も優れた部屋となり、西日の眩しさからも解放されている。



(写真 松本明彦)



(写真提供 香川浩)

- ・ユニットAからはグループホームの屋上庭園に徒歩または車イスで出ることができ、直接外気に接して良好な環境を体感できる。
- ・浴室、医務室、トイレ等の衛生維持が重要な居室内には汚染・感染症対策のため光触媒溶液が塗布されている。

8. グループホーム

- ・ユニットケアを前提に設計されたグループホームで、居室は全室個室で個別トイレを持つ。
- ・グループホームは2つのユニットが独立して配置されており、それぞれのユニットの入所者は玄関付近の壁面に設置されたテーマカラーの銘板で各自の所属するユニットを判別する。
- ・玄関は室内とギャップレスのバリアフリー仕様で、下足スペースと下足入れが設けられている。



- ・グループホームの2ユニットは住宅的な居住性をもたらすスケールで設計されており、床暖房や個別トイレを完備する他、木質系素材で構成された居室、居間（和室）、食堂を備える。
- ・個人の居室、浴室、居間、食堂など入所者の利用に供する空間には全て床暖房が敷設されている。
- ・各ユニット内の生活空間は、私的空間（居室）、半私的空間（談話スペース）、半公的空間（居間）、公的空間（食堂）という、プライベートからパブリックまで4つの異なるレベルの空間で構成されており、認知症高齢者にとって重要な「心地が良い『居場所』」の選択性を提供する。



(写真提供 香川浩)

- ・完全個室型の居室は就寝、着替え、その他独りで過ごす静かな時間のための空間、あるいは極めて親しい友人や家族を招き入れる空間と位置づけられる。
- ・談話スペースは独りで、あるいは施設内の特に

親しい人との茶飲み話や、会話ができる場所と位置づけられる。

- ・食堂はユニットの全入所者が一堂に会して食事をする、ユニット内で最もオープンな場である。これに近接して、より小規模な、しかも和室型の空間として居間が設けられ、好みに合わせて日中の生活や食事の場面を選択できるように配慮されている。



- ・各ユニットの居間（和室小上がり）には床の間の有無など、微細な仕様の違いがあるが、これはそれぞれのユニットの入所者が独自にコーディネートできる余地を残すことを意図している。掛け軸や生け花、ディスプレイなど、ユニット構成員の個性の発露が期待される。
- ・各ユニットの食堂は中庭に面して窓が設けられ、玄関を通らずに直接中庭に出ることができる出入口も計画されており、午前から午後にもたがる中庭での園芸作業においてその利便性が発揮される。

9. サンプルーム

- ・施設名称「花の里かつほ」の由来である園芸活動を福祉療法に活用するとともに、「地域の庭づくり」の拠点として、また園芸作業や植物、菜園鑑賞のための空間として利用できるよう設けられた園芸室、温室としての性格も兼ね備える空間。
- ・室内には屋内外で使用できるベンチが備えられ、また水栓や水洗い可能な床など、園芸作業に適した仕様となっている。
- ・サンプルームの外部には、中庭から北東の沢田川方

向へと穿たれたトンネル状の空間があり、中庭に爽やかな風を通すとともに、園芸作業用具の一時保管、悪天候時の花苗やプランターの待避にも利用できる。

- ・中庭に面する開口部には左右に全面開放できるよう、折りたたみ式のスライドサッシを用い、室内側にアコーディオンタイプの網戸を設置した。



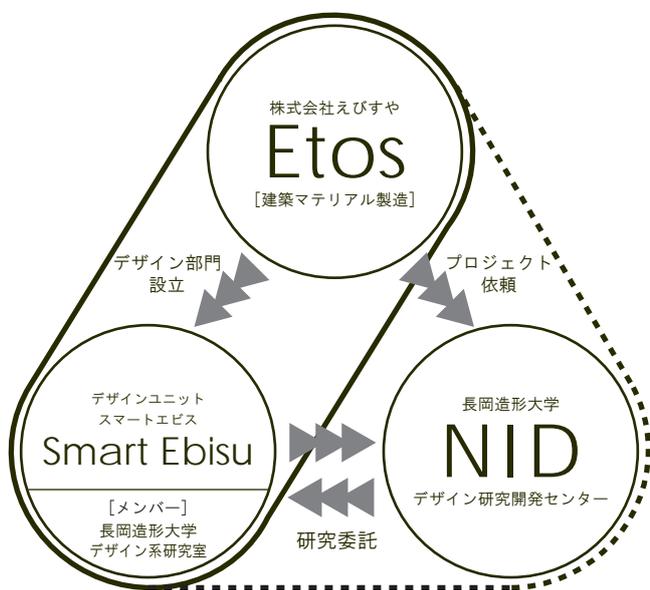
10. 照明

- ・照明計画においては、空間に一体感を持たせるため、室内照明の色温度を3000ケルビン（電球色）に統一した。電球色は自然な色合いで、心地よい光をつくりだす。
- ・職員駐車場の街灯は、南東側の端に設置された高輝度の照明に誘蛾灯の役割を担わせ、その他の照明は輝度を抑えて「光害（夜景を害する unnecessary 照明）」を防いでいる。

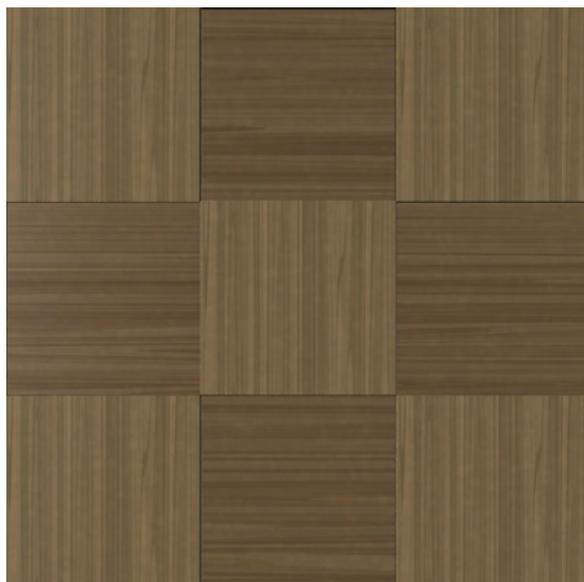


エビスヤ スマートソピア ドアコレクション

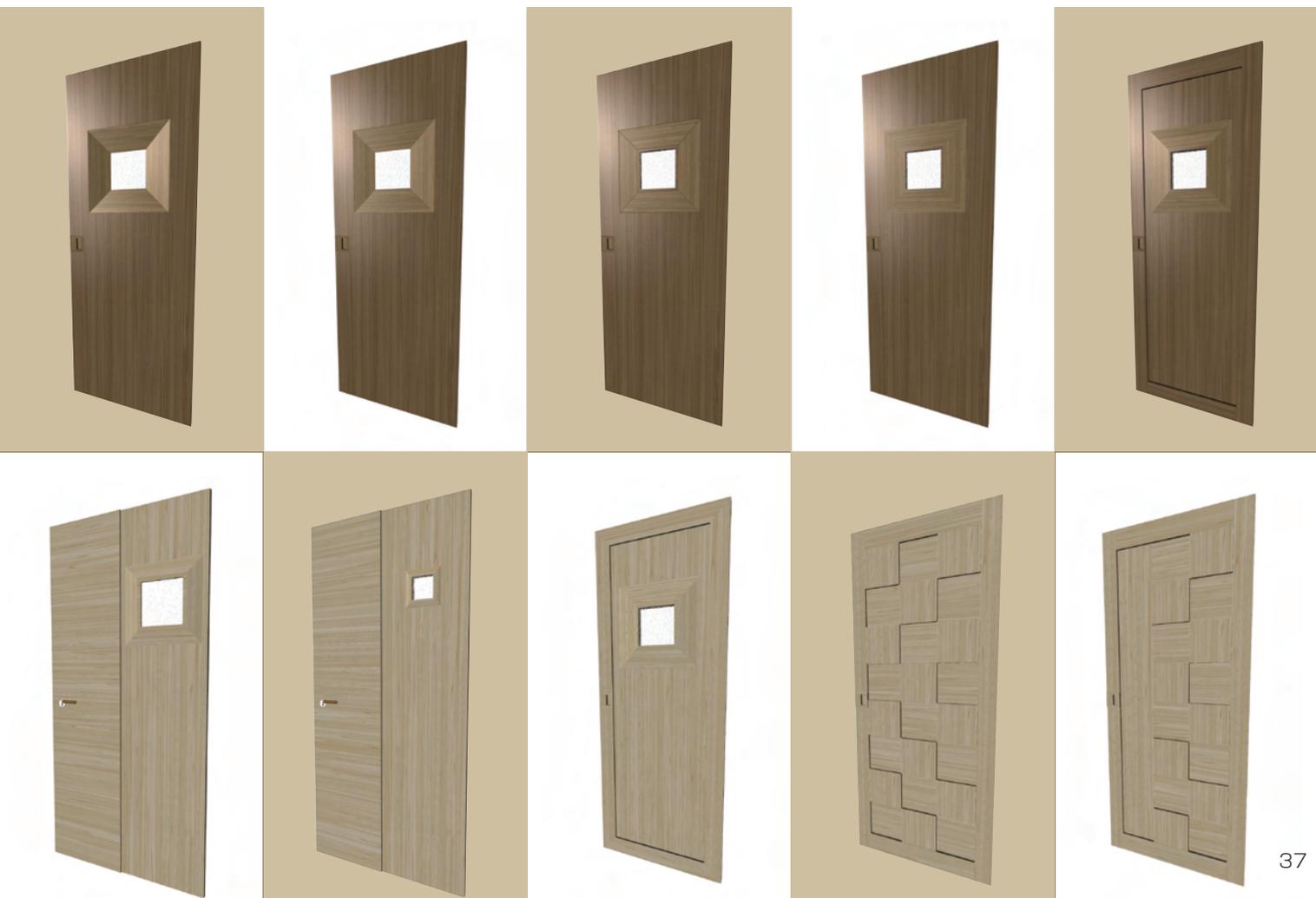
藤澤忠盛 瀬高裕志



市松模様



市松模様とは、格子模様的一种で二色の正方形を交互に配した模様である。江戸時代の歌舞伎役者、初代佐野川市松が舞台にて、白と紺の正方形を交互に配した袴を履いたことから人気を博し、それが起源となり現在でも伝統的な模様として利用される。独特な和の雰囲気演出する市松模様を、新たに木で表現したモダンデザインであり、多様化するインテリアデザインにも対応し、ドアとして様々な室内空間になじむことが可能である。



受託事業名：

カーポートのデザイン提案業務

発注者：株式会社関根製作所

受託期間：平成19年10月1日～平成19年12月31日

プロジェクト主査：森 望

プロジェクトメンバー：

●プロジェクトの内容

本プロジェクトは、アルミ加工でカーポートやサンルームなどを製作している関根製作所よりの委託。今回は以下のカーポート6案を提案した。

